

文化教授の方向—教材研究を通して

広島大学大学院

深 沢 清 治

1 はじめに(文化教授の意義・目的)

外国語教育の目標を考えた場合、コミュニケーションのための、いわゆる4技能の養成および外国文化の理解とするものが多く見受けられる。諸外国の英語を初めとする外国語教育のシラバスを概観しても、言語材料とそれを盛り込む文化的題材を列挙してあるものが多い。これに対して日本の指導要領の記述は、言語材料の側面が詳細かつ整然としているのに対して、題材面は外国の人々の生活やものの見方などについて理解を得させる」と、僅かに触れてあるに留まり、社会・文化面の指導は教える側に任されていると思われる。これではややもすると言語を構成する材料のみの教授で英語教育の目的が事足りたということになりかねない。外国語学習の目的の1つに、Rivers を初め多くの外国語教育者が、目標言語を話す人々の生活、思想、文学などを通して国際理解を深めることを挙げている。そういった内容を盛り込む題材面の重要性を無視した言語材料のみの教授は外国語教育の価値を果たし得るものではないと考える。文化面の指導を付け足しとする考え方に対して Fries (1955: 1-2) は、文化を扱うことが主目的から離れた付け足しではなく、どの段階でも必要であると主張し、また Politzer (1954: 100-101) も、教師が文化の重要性を認識しておかないと、意味のないシンボルを教えることになり、生徒が自分の属する文化の尺度で異文化を視る危惧もあるとして、文化を教えることの意義を強調している。

そこで、本研究では文化教授への具体的なアプローチとして、Joiner (1974: 242) の、教科書が生徒に外国文化を理解させる上で教師と共に大きく影響するという主張をふまえながら、教科書の題材を中心に論を進めていくことにする。これまで、中学校の教科書においては、題材および題材形式に関する分析が井出 (1972: 15-17) を初めいくつか発表されているが、高校のテキストに関してはほとんど見られない。さらに、日本の教科書には道德的物語が多く、実際の生活場面に根ざした日常生活に関するものが少なく、文法項目中心に並べられ文化的に貧弱であるとする Perkins (1978: 26) の指摘が的を得ているのかどうかを見るために、以下高校英語Bリーダーの教科書の題材、および題材形式を分析し、文化的題材がどのように、またどのくらい取り上げられているかを明らかにしていきたい。

2 題材と文化

外国語教育の目標から文化理解を取り除こうとする考えの原因としては、題材に含まれる文化が実に膨大な分野を含み、また文化という概念自体が明確にされていないこと、またマスコミの影響で外国の生活文化の多くが我々の日常生活の中にはいり込んできており、文化面はもはや教える必要がないとする考えがあるものと推測される。

確かにこれまで外国の風物文化が無差別に輸入されてきたが、必ずしもあるがままに受け入れられたわけではなく、日本的なものの見方、考え方のフィルターを通して受け入れられた側面が多々あるように思われる。異文化間コミュニケーションがより身近なものになってきた今日、文化の指導もこれまでのような受身的な理解に留まるものではなく、発表・表現のための正しい理解、

若しくは how と共に表現内容 what を持つ意味でも重要であると考え。そうなると、表現の器としての言語技能のみの学習では不十分で、器に何を盛り込むか大きな比重を占めるべきであり、外国文化の理解、さらにはそれに対応する日本文化の理解も異文化間コミュニケーションのためには大きな役割を果たすことになると思われる。

ここで実際に教科書の題材研究にあたって文化面を計るものさしを持っておくことが必要となる。文化の定義には従来2つの考え方があり、Allen and Valette (1977: 325) によれば、従来の人文主義的な考えによるもの、たとえば、科学、芸術などといった文明に寄与する文化でこれを big-C-Culture とすると、これに対して社会科学的な考えから、ある国民の共通にもつ行動パターンや生活様式といった small-c-culture という考えがある。これらに加えて、題材の分析を進めていくうちに、外国事情の理解の中には、元来、社会科の範囲である地理、歴史、現代社会といった分野もはいつてくる。国際理解を進めるための異文化理解は英語科だけの守備範囲ではなく他教科との兼ね合いの中に生まれるものであり、英語で扱うべき題材文化は、芸術・科学的分野を除けば、言語と結びついた外国人の生活様式、ものの見方といった側面になるものとする。以上、外国の外的事情、地理、歴史、および2つの文化概念を題材の3つの柱として設定する。

A: 外国の地理、歴史、風物

B: 外国人の日常生活様式、ものの見方

C: 芸術、科学、および哲学的遺産

さらに、各々のカテゴリーを教科書の分析結果、および Finocchiaro and Bonomo (1973), van Ek (1977) の考えをベースに細かく下位区分して題材の範疇化を試みたのが次の表である。

(表1)

(題材のカテゴリー) (表1)

A. The outward features of a country.

1. Geography (the capital and important cities, climate, season, ...)
2. History (historical events, great personalities, ...)
3. Modern society (peace, social problems, ...)
4. Industry (economics, agriculture, ...)
5. Human races and languages spoken

B. Ways of life in a country (culture with a small c)

1. Introduction and personal identification (greetings, leave-taking, names and nicknames, address, telephone number, date and place of birth, ...)
2. House and home (type of accommodation, rooms, furniture, amenities, ...)
3. Life at home (family relationship, members, daily routine at home, pets, ...)
4. Education and future career (daily routine at school, discipline, recreation at school, exam, subjects, school year, future career)
5. Free time and entertainment (hobbies, interests, radio, TV, how to spend leisure time and holidays, indoor and outdoor activities, ...)
6. Travel (making a trip on vacation, transportation, traffic, automobiles, roads, ...)
7. Relationships with others (friendship, invitations and appointment, correspondence, humor, time and space concept, body language, taboo, usual topic of conversation, manners and etiquette, ...)
8. Service (hygiene, post, telephone, bank, telegraph, police, hospital, drugstore)
9. Social customs (masculine and feminine role, religion, superstition, ceremony, national holiday, clothing, ...)

- 10. Foods and Drinks (typical foods, places where they eat and drink, tipping, ...)
- 11. Shopping (money system, weight and measure, shopping supermarket, advertisement, ...)
- C. Development of civilization in a country (Culture with a big C)
 - 1. Literature (important writers and their works, ...)
 - 2. Art (paintings, sculpture, architecture, ...)
 - 3. Dramatic art (outstanding plays, writers, famous films, ...)
 - 4. Music (outstanding performance and composers, classic and pop music, ...)
 - 5. Science and technology (chemistry, biology, math, physics, practical inventions, ...)
 - 6. Thoughts and philosophy

3 教科書の題材分析

ここで題材研究の対象としては、いずれも昭和54年度発行の3種類の英語Bのリーダーのテキストを用いた。これまで高校の教科書に関しては題材および表現形式の研究が多くは行われておらず、中学校の教科書に関して幾つか見られるのみである。文化教授の一手段となるものは教科書教材、特にリーダーのテキストの題材であり、題材にどのような文化が含まれているのかを知ることは、文化教授に対する教科書作成者側の姿勢を知る上でも意義があるものと思われる。

(1) 題材形式の分析

まず題材形式としては、指導要領において中学校段階では「説明文、対話文、物語、劇、日記、および手紙文」とあるのに加えて、高校段階ではさらに、伝記、小説、詩、随筆、論文、および時事文が加えられているため、これらの定められた範疇をもとに、3種の教科書の題材形式分布をみたのが次表である。(表2) 中学のテキストの場合は対話文が圧倒的多数を占めているが、高校ではある程度多岐にわたることを予想して、a, b, c, dの4つのランクを設けた。

(表2)

| 教科書 \ 形式 | 説明文 | 対話文 | 小説・物語 | 劇 | 日記 | 手紙 | 伝記 | 詩 | 随筆・論文 | 時事文 |
|----------|-----|-----|-------|---|----|----|----|---|-------|-----|
| N.H. | 1 | b | d | c | | | c | d | | d |
| | 2 | a | d | c | | | | d | d | |
| | 3 | | | c | | | | d | b | |
| H. | 1 | b | | c | | d | d | d | d | |
| | 2 | d | | c | | d | c | d | c | d |
| | 3 | b | | c | | | | d | c | |
| V. | 1 | d | | a | | | d | | d | |
| | 2 | c | | a | | d | | d | d | |
| | 3 | d | | a | | | | | c | |

N.H. = New Horizon English Readers

H. = Highroad to English Reading

V. = The Vista English Readers

(使用教科書)

調査方法

教科書の各単元の題材形式を下記の10種類のカテゴリーに分類し分布をみる。

調査結果と考察

- a 全巻の $\frac{1}{7}$ 以上を占めるもの
- b 全巻の $\frac{1}{3}$ 以上を占めるもの
- c 3つ以上の単元で扱っているもの
- d 1つないし2つの単元で扱っているもの

この結果、各教科書でばらつきがあるものの、物語、小説、詩といった文学に属するものが大きな比率を占めているのがわかる。時事文が非常に少ないのも裏返せば教科書の英語がbookishであるという批判の一面を窺わせるものと思われる。

(2) 題材の文化内容

さまざまな形式を用いて示された題材にどんな内容が盛り込まれているかを見るのが次の段階である。これにより、各教科書が適当な文化事項を示しているか、それとも何の配慮も成されていないものがないかを見ることを目的とする。

調査方法

まず教科書の単元をまず詳細に読んで、その題材が先述の3つのカテゴリーのどれに重点が置かれているかを判断し、さらに行数や文化事項の数から考えて1（ほとんど表れていない）から5（大部分を占める）の5段階で各単元をカテゴリーごとに判定した。たとえば「インドの地理、気候」を扱っていて、ほかにインドの日常生活様式や、芸術などを全く扱っていない単元はAが5、B、Cがそれぞれ1と判定される。こうして1つの教科書について各カテゴリーごとに値を集計し単元数で割ったものが次の表3である。

(表3)

| | New Horizon | | | Highroad | | | Vista | | |
|---|-------------|------|------|----------|------|------|-------|------|------|
| | 1 | 2 | 3 | 1 | 2 | 3 | 1 | 2 | 3 |
| A | 1.43 | 1.94 | 1.44 | 1.92 | 2.27 | 1.71 | 1.20 | 1.43 | 1.36 |
| B | 1.89 | 1.69 | 2.25 | 1.76 | 1.67 | 1.78 | 1.47 | 1.79 | 1.14 |
| C | 3.00 | 3.56 | 3.13 | 2.69 | 3.13 | 3.57 | 3.93 | 3.50 | 4.07 |

調査結果と考察

この表で、教科書間の学年、およびカテゴリー別の題材の相対的比重がおおまかに把握できる。この結果、明らかにカテゴリーCの芸術・科学的な意味での Culture with a big C の側面が多く扱われているのがわかる。これは題材形式の上で、文学として分類されるものが多いこととも関連があるように思われる。逆に日常生活場面に根ざした、身の回りの文化、およびものの見方を扱った culture with a small c の側面は少ないことが判明した。コミュニケーションは言語のみで行われるのではないという考え方が広まり、Body language を初めとする社会科学からのアプローチによる文化的題材もいくつか見られたが量的には少ないと言える。また、いわゆる風物誌的アプローチでは、「イギリスの気候」がどの教科書にも出てくるが、全体と

しては、外国の自然、地理のみを扱ったものはあまり見られなかった。

このように現行教科書の分析を行ってきたが、文化教授を考えた場合には各カテゴリーをどのようなバランスで取り入れるのが理想的かは、学習者の教材に対する興味も考慮に入れる必要がある今後の課題と言えそうである。

4 結論

指導要領の改訂のたびに大きく取り上げられるのは、言語材料の分野で、題材面は、毎回、ほとんど変化がないのは、我々を取り巻く外的事情の大きな変化に対応したものではないという印象を受ける。また題材面の充実が呼ばれる前段階として、語いレベルに見られる文化の差、またもう一步進んで、表現レベルでの文化内容が随分示されてきているが、あまりに分野が膨大で、散発的な研究に終わっている感がある。そこで文法シラバスと同様に、題材面においても題材の提示形式のみならず、内容自体の文化のシラバスといった枠組を作り、まず教科書の題材の文化面から充実させていくことが、文化を教えるうえで、最も近道になるのではないかと考える。そこで中心となる分野はどんなものであろうか。国際児童年や海外旅行、マスメディアを通して外国の地理、風物知識の理解が著しく向上したのは疑いがない。また、芸術、科学、文学は直接、英語教育の専門領域ではなく、まず身の回りのことを理解、表現する意味で、社会学者の言う small-c-culture、および鈴木（1973）の示す「見えない文化」、表層は同じでも役割の異なる way of life の側面が英語教育の守備範囲になるものと考えられる。さらに国際理解教育の叫ばれる中で、指導要領も中学校では昭和44年度の改訂から特定の国々、例えばアメリカ文化のみに限らず、広い範囲から題材を選択することを示唆しており、広く、英語を使用する異民族、異文化内の日常生活様式、ものの見方を扱うことが必要になってくるものと思われる。ここで、異文化理解にまでは到らなくとも、とりあえず日本語訳がつけばそれで良いとするのも英語学習の目標として考えられる。しかし、異なった言語を学習することによって、いかに言語がそれを話す人々の社会、文化（culture）に影響されているのかを認識すること、また生徒自身の育った言語・文化とは異なったものに触れるということが学校で英語を学ぶことの意義であると考えられる。さらに教室を離れた後の異文化間コミュニケーションの場においても、文化として表われた外国人のものの見方、考え方などを理解しておくことは、外国語を用いての真の理解・表現のためには不可欠のものであり、これは裏返せば自国文化への反省、理解にもなるものと思われる。

参考文献

井出祥子（1972）「題材と表現形式」『英語教育』10月号 15-17

鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波書店

Allen, Edward David and Rebecca M. Valette (1977) *Classroom Techniques: Foreign Languages and English as a Second Language*. Harcourt Brace Jovanovich, Inc.

Brooks, Nelson (1964) *Language and Language Learning: Theory to Practice*. Second Edition, Harcourt, Brace & World, Inc.

van Ek, J.A. (1977) *The Threshold Level for Modern Language Learning in Schools*. Longman Group Ltd.

Finocchiaro, Mary and Michael Bonomo (1973) *The Foreign Language Learner: A Guide for Teachers*. Regents Publishing Company, Inc.

Fries, C.C. (1955) "American Linguistics and the Teaching of English," *LL* Vol. 6, No. 1 & 2, 1-22.

- Joiner, Elizabeth G. (1974) "Evaluating the Cultural Content of Foreign-Language Texts," *MLJ* Vol. 58, No. 5-6, Sept.-Oct. 242-244.
- Perkins, Leo G. (1978) "Developing Communicative Competence in English," *English Language Education Forum* Vol. 1, No. 1, Dec. 26-29.
- Politzer, Robert (1954) "Developing Cultural Understanding through Foreign Language Study," Cited in Brooks (1964).
- Rivers, Wilga M. (1968) *Teaching Foreign-Language Skills*. The University of Chicago Press.